

# 第38回野口賞 3部門に2氏1団体決まる

## 独創性で新領域開拓

従来の竹の概念を超え、伝統的な竹工芸をアートの領域に高めた活動で知られる。竹を使って造形作品を作る作家自体が少なく、新しい美術の領域をつくり出した。パイオニアといえる存在だ。

70歳を超えた今もチャレンジを続け、独創的な活動はさらに広がりを見せている。長く個展を中心に発表を続けてきたが、「自作について客観的な評価を受けよう」と二昨年、全国公募の美術展に初出品。2年目の昨年は新人賞を受賞した。

昨秋は甲府市役所の新庁舎を会場に、大小約40点の作品を並べる大規模な展覧会を開催。「こんな作家が地元にはいたのか」という反応も多く、従来の美術ファンとは異なるさまざまな人に見てもらえた。昨夏には、ロンドンやオックスフォードなど英国の3都市でワークショップを行い、竹のアートを世界に発信している。

作品は多彩で、「三つの顔を持つ」とも評される。伝統的な技法を用い実用性を重んじた、かごなどの工芸作品、伝統と独創を融合させデザイン性と実用性を兼ね備えたランプシェードや花かご、そしてアーティストとしての創造性



### 芸術・文化部門 保坂 紀夫さん 竹工芸を芸術に昇華

に満ちた自由な作品がある。

こうした作品群は、各地の竹職人に教えを請い、六十数種類もあるといわれる竹の編み方を習得したからこそ生まれた。「職人を目指したのではなく、目的はあくまでアート。作り方を知らなければ新しいデザインは生まれない。竹をさばく技術や編む技術、デザイン力、立体感覚、設計能力など、竹のアートには幅広い能力が求められる」

造形素材としての竹が持つ変幻自在な可能性に着目した保坂さんの持論は、「想像力と技術力があれば、どんな形でもできる」。そこには、工業デザイナーとして長くプラスチック製品の開発に携わった経験が投影されている。

「プラスチックは原料や成型法が多様で、それ用途に応じて使い分けている。必然的にデザイナーには素材開発や用途開発も求められる」。作品(用途)に合わせて、さまざまな太さや長さの竹(芯(原料)を作り、編み方(成型法)を使い分ける現在の仕事に、すべてつながっている。

「修練を積み竹も能力を発揮してくれる」。竹を使ったチャレンジに終わりは無い。「五味優子」

ほさか・のりおさん 1940年旧竜王町(現甲斐市)生まれ。武蔵野美術大工芸・工業デザイン科卒。企業の工業デザイナーの傍ら竹工芸の技術を学び、81年に甲府に保坂デザイン研究所を設立。全国で個展を開催、海外でもヨーロッパを皮切りに米国、アジアで活動する。武蔵野美術大、愛知県立芸術大で定期的に講義も行っている。